



■ システム認証事業本部

Case Study: REVSONIC 株式会社

他社の重要な開発業務を受託。
情報セキュリティへの危機感をかたちにするために、ISO27001 を取得。

REVSONIC 株式会社

神奈川県横浜市

ISO27001 2009 年 11 月取得

REVSONIC

事故が起こってからでは遅い！

横浜に本社を置く REVSONIC 株式会社(以下 REVSONIC 社)は、半導体やメカトロニクス製品の開発を大手メーカーから受託するエンジニア集団だ。2005 年創業の新しい会社だが、事業は順調な伸びを見せ、業績は年々右肩あがりに伸びている。



砂子坂社長

社長の砂子坂宗則氏がエンジニア派遣会社の営業職を務めていたときに、「エンジニアを派遣しているだけでなく、キラーコンテンツを自社開発できる優れたエンジニア集団の会社をつくりたい。そのほうがエンジニアにとってもいい」と思ったことが起業のきっかけとなった。

当初はエンジニア派遣を主な事業としていたが、一方で独自の技術開発に取り組み、数年前から半導体とメカトロニクスの分野で、念願だったキラーコンテンツが生まれてきた。その結果、大手メーカーから重要な開発案件を受託するようになったのである。

このように、わずか創業 5 年で会社を目標のかたちに近づけた砂子坂社長だが、進捗状況がよければよいほど、大きくなる心配があった。それは「情報管理」問題だった。

急成長している会社にはよくある話だが、質量ともに急激に増える仕事に社内の情報管理体制が追いついていかないのだ。ましてや同社の「仕事」はすべて大手メーカーの重要かつ機密性の高い開発案件に関係している。砂子坂社長は、「取引先である大手メーカーの管理体制レベルへ近づけるため、またわかりやすい形で管理体制を構築するためのツールが必要だ。何より事故が起こってからでは遅い」と強く思ったそうだ。

とはいえ、砂子坂社長には、若く个性的なエンジニアが多い社内で「きちんと情報を管理する」基準が、各自によって大きく違うこともよく分かっていて、そこで、「ルールを作ってしまうのがいちばん近道で間違いがない」と、以前から優れた管理システムとしてその概要を知っていた ISO27001 の導入を決めたのである。



BUSINESS VISION

BUREAU
VERITAS

BUREAU VERITAS JAPAN CASE STUDY



「自助努力+外部コンサルタントからの指導」により、マネジメントシステムを構築。

こうして、ISO27001 取得を決めた REVSONIC 社だが、取得には1年2ヶ月をかけた。その一番の理由は、「コンサルタントに頼らずに、自分たちで全部やりたかったから」と、事務局の宮崎翼氏は言う。その言葉どおり、宮崎氏と同じく事務局の国井勝氏が中心となって、まずは部署ごとに情報資産の洗い出しと、洗い出された情報資産の CIA 評価を行った。

取得の統率役を任された国井氏は、「忙しい中、膨大な情報資産を洗い出して、その一つ一つを4つの切り口(機密性、完全性、可用性、脆弱性)から評価するという作業は、忙しい各部門の担当者たちにとっては苦行のようなものでした。ですから、当然、不満の聲があがるし、いつまでたっても重い腰をあげない人たちも少なからずいました」と当時の苦勞を語る。

仕方なく、国井氏がとった方法は「締め切りに間に合わないなら、こちらで勝手に判断して情報管理方法を決定するので、それに従うこと」という“逆張り戦法”。

「勝手に決定された方法を押し付けられるぐらいなら、いくら面倒でも自分たちでやったほうがいい」と今まで難色を示してなかなか作業に取り掛からなかった担当者たちも、重い腰をあげて、協力体制に入ってくれたようだ。

しかし、その次の作業、洗い出した情報資産に対して「何をどこまでやればいいのか」という判断と線引きについては、コンサルタントの力を借りることにした。

「経験のない私たちには、やはりこの判断は難しいものでした。ガチガチにルール化すればするほどいいのかというところでもない。でも、必要以上にルーズにするとそもそも ISO27001 を運用する意味がない。その程度よい匙かげんについては、やはり専門家の意見と指導を仰ごうということになったのです」と宮崎氏は言う。



本社屋(横浜市)

意識の変革と仕事効率のアップを達成。

こうして、「自助努力+外部コンサルタントからの指導」を上手に組み合わせて ISO27001 の運用に漕ぎ出した REVSONIC 社。その後の様子はどのようなだろうか。

まず、いちばん大きかったのは、社員の意識変化だったという。導入当初、「自分たちが今まで普通に接していた情報がこんなに機密性が高く、取り扱いに注意を要するものだったのか」と多くの社員が驚き、それまでの取り扱い方について反省する声がしきりに聞かれた。

次に、変わったのは、情報が個人ファイルから共有ファイルに移されたことで、きちんと管理されるようになったと同時に仕事の効率化にも繋がったことである。

こうした目に見える効果が出てくるにつれて、ISO27001 に対する周囲の空気も変わり、「今では7割の社員が『多少手間が増えたけど、取得してよかった』と言ってくれるようになりました」と国井氏は言う。



その言葉は実際の行動にも現れており、社内伝達のためのインターネット掲示板に国井氏が新たに気づいたことを回覧すると、それに対して反応があり、「私はこういうことが気になります」と書き込みがされるようになってきた。



左)国井氏 右)宮崎氏

これらの「新たな気づきや情報」は、現在、事務局に蓄積され、次回のリスクアセスメントや定例ミーティングの際に机上に上ることになっている。

砂子坂社長は、「ISO27001 取得の当初の動機は、クライアントに『安全保障』の印籠として見せたいというものでしたが、取得のプロセスや運用を通して、それだけではない本質的な効果や意識変化をわが社にもたらしてくれたと思います」と言う。

その言葉を裏付けるように、どのクライアントにも「ISO27001 を取得しました」と、対外的にはアナウンスしていないようだ。「取得し運用して分かったことで

すが、これはむしろ“当たり前”のこと。当たり前のことを仰々しく言うのは格好良くないし、当たり前のことを今までできていなかったことの反省もあるので・・・」と砂子坂社長。REVSONIC 社にとって ISO27001 取得は、情報資産の重要性に改めて気づき、その確実な管理もビジネス コンテンツの一つであるということ、強く認識するトリガーとなったようだ。

(取材日:2009年3月4日)

ビューローベリタスのサービス

 ISO27001 情報セキュリティマネジメントシステム認証業務